

切断・骨折・腰痛（13問）

はき国家試験 リハビリテーション医学

【切断】

はき 3-96 大腿切断について誤っている記述はどれか。

1. 閉塞性動脈硬化症が原因となる。
2. 実用的義足歩行が可能である。
3. 断端浮腫は義足装着の障害となる。
4. 幻肢感覚は日常生活動作の障害となる。

はき 7-94 下肢の切断について誤っている記述はどれか。

1. 循環障害に起因する切断は減少している。
2. 拘縮の予防に伏臥位をとらせる。
3. 断端浮腫に対して弾性包帯をまく。
4. 幻肢は失われた部位が残っている感覚である。

はき 12-95 下肢切断と起こりやすい関節拘縮との組合せで誤っているのはどれか。

- | | | |
|--------------|---|---------|
| 1. 大腿切断 | — | 股関節屈曲拘縮 |
| 2. 下腿切断 | — | 膝関節屈曲拘縮 |
| 3. サイム切断 | — | 膝関節伸展拘縮 |
| 4. リスフラン関節離断 | — | 足関節屈曲拘縮 |

はき 16-90 大腿切断後の指導で正しいのはどれか。

1. 背臥位で断端の下に枕を置く
2. 腹臥位の励行
3. 股関節の外転位保持
4. 車いす乗車の励行

はき 18-90 患肢で荷重するときに義足を必要とする切断部位はどれか。

1. 大腿切断
2. 膝関節離断
3. サイム切断
4. 中足骨切断

はき 22-91 活動性が高い下腿切断患者に適した義足の足継手はどれか。

1. 固定足
2. 単軸足
3. 多軸足
4. エネルギー蓄積型足

はき 24-85 我が国において 1990 年以降の下肢切断の原因として最も多いのはどれか。

1. 外傷
2. 骨髄炎
3. 骨肉腫
4. 糖尿病性壊疽

はき 27-84 血管障害による下肢切断について正しいのはどれか。

1. 早期からの断端圧迫は禁忌である。
2. 非切断側の血流障害を評価する必要はない。
3. 切断直後に幻肢痛を生じる。
4. 糖尿病性足部壊疽は原因となる。

【骨折】

はき 13-96 大腿骨頸部骨折で手術直後に行わないのはどれか。

1. 創部へのホットパック
2. 両下肢の関節可動域訓練
3. ベッド上での体位交換
4. 車いす座位訓練

はき 17-91 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換手術前後のリハビリテーションで正しい記述はどれか。

1. 手術前は両下肢の自動運動を禁止する。
2. 手術創が癒合し抜糸してから座位を開始する。
3. 座位が安定してから歩行訓練を開始する。
4. 術後 1 か月は患肢の荷重を禁止する。

はき 28-88 大腿骨頸部骨折について正しいのはどれか。

1. 交通事故による受傷が最も多い。
2. 寝たきりの原因となることが多い。
3. 安静期間において手術を行うことが推奨される。
4. 術後 8 週以降で荷重訓練を開始することが多い。

【腰痛】

はき 6-96 腰痛の治療について誤っている記述はどれか。

1. 運動療法により姿勢の改善を図る。
2. ウイリアムス体操は腰椎の伸展訓練である。
3. 間欠牽引はマッサージ効果を期待する。
4. 軟性コルセットは腹圧を高め症状を軽減する。

はき 14-94 腰痛患者のリハビリテーションで誤っているのはどれか。

1. 膝と股関節を軽く屈曲して寝るように指導する。
2. 物を持ち上げる際には中腰姿勢をとるように指導する。
3. 腹筋の筋力増強訓練をする。
4. 股関節のストレッチ体操を指導する。

切断・骨折・腰痛（18問）

あまし国家試験 リハビリテーション医学

【切断】

あ 18-99 下肢の切断原因で近年特に増加しているのはどれか。

1. 腫瘍
2. 交通外傷
3. 血管障害
4. 労働災害

あ 21-100 下肢切断患者の幻肢痛について正しい記述はどれか。

1. 断端部の神経痛である。
2. 麻薬の使用は禁忌である。
3. 義足歩行時に著明となる。
4. 早期の義肢装着が有効である。

あ 23-85 下腿切断術後に起こりやすい拘縮はどれか。

1. 脛骨内旋拘縮
2. 膝関節屈曲拘縮
3. 股関節伸展拘縮
4. 股関節内転拘縮

あ 24-86 下肢切断後の合併症で義足歩行訓練に有利に働くのはどれか。

1. 浮腫
2. 幻肢感覚
3. 血腫
4. 骨突出

あ 25-86 カナダ式ソケットの適応となるのはどれか。

1. 股離断
2. 大腿切断
3. 膝離断
4. 下腿切断

あ 27-87 下肢切断で最も頻度が高いのはどれか。

1. 膝関節離断
2. サイム切断
3. 大腿切断
4. 下腿切断

あ 28-87 下肢切断で断端管理の目的として誤っているのはどれか。

1. 浮腫予防
2. 筋力強化
3. 断端成熟促進
4. 拘縮予防

【骨折】

あ 8-106 骨折のリハビリテーションについて誤っている記述はどれか。

1. 固定中の関節は等張性の運動を行う。
2. 固定されていない関節の運動も行う。
3. 下肢では段階的な荷重歩行訓練を行う。
4. 関節可動域訓練前に温熱療法を行う。

あ 10-104 骨折について誤っている記述はどれか。【解答2つ】

1. 介達牽引は皮膚に絆創膏を巻きつけ、その上から牽引する。
2. 直達牽引は骨に鋼線を刺入して牽引する。
3. ギプス固定中も等尺性筋力強化を行う。
4. 関節可動域訓練は骨癒合が完成してから行う。

あ 14-104 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換術後のリハビリテーションで誤っているのはどれか。

1. 臥床中の排痰訓練
2. 両下肢の関節可動域訓練
3. 座位からの立ち上がり訓練
4. 患部への極超短波療法

あ 23-88 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換術後のリハビリテーションで正しいのはどれか。

1. 骨盤牽引を行う。
2. 早期に荷重を開始する。
3. 股関節内旋運動を行う。
4. 患部に極超短波療法を行う。

あ 25-89 大腿骨頸部骨折のリハビリテーションで正しいのはどれか。

1. リハビリテーションは手術後から開始する。
2. 内固定術の場合、脱臼肢位に注意する。
3. 術後疼痛緩和のために極超短波療法を行う。
4. 人工骨頭置換術の場合、術直後から歩行訓練を行う。

【腰痛】

あ 2-99 腰痛の治療で誤っている記述はどれか。

1. 急性期から積極的に腰痛体操を行う。
2. 漸増的に腰椎の間欠牽引療法を行う。
3. 訓練法にウィリアムズ体操がある。
4. 温熱療法を行う。

あ 3-106 腰痛について誤っている記述はどれか。

1. 直立歩行が原因の一つである。
2. 腹腔内の臓器疾患でも起こる。
3. ラセーグ徴候は椎間板ヘルニアでみられる。
4. 急性期には股関節・膝関節伸展位を保持させる。

あ 10-106 腰痛の治療で適切でない記述はどれか。

1. 急性期には間歇牽引を行う。
2. 持続牽引は6～8kgの重錘で行う。
3. 温熱療法は筋肉のスパズムを除く効果がある。
4. 運動療法は腹筋の強化を行う。

あ 13-106 腰痛の運動療法で正しいのはどれか。

1. 治療よりも予防が主な目的である。
2. 速いスピードで体幹を動かす。
3. 体幹の回旋運動は伴わない。
4. 腰椎前弯が増強する姿勢を指導する。

あ 16-99 腰痛に対する運動療法で誤っているのはどれか。

1. 腰椎から骨盤にかけてのアライメント矯正
2. 体幹・下肢のストレッチ
3. 体幹筋の筋力強化
4. 体幹の速い回旋運動

あ 23-87 腰痛に対して行われるリハビリテーションで正しいのはどれか。

1. ウィリアムス体操
2. フレンケル体操
3. ボバース法
4. ボイタ法

切断・骨折・腰痛（13問）

はき国家試験 リハビリテーション医学

【切断】

はき 3-96 大腿切断について誤っている記述はどれか。

1. 閉塞性動脈硬化症が原因となる。
2. 実用的義足歩行が可能である。
3. 断端浮腫は義足装着の障害となる。
4. 幻肢感覚は日常生活動作の障害となる。

はき 7-94 下肢の切断について誤っている記述はどれか。

1. 循環障害に起因する切断は減少している。
2. 拘縮の予防に伏臥位をとらせる。
3. 断端浮腫に対して弾性包帯をまく。
4. 幻肢は失われた部位が残っている感覚である。

はき 12-95 下肢切断と起こりやすい関節拘縮との組合せで誤っているのはどれか。

- | | | |
|--------------|---|---------|
| 1. 大腿切断 | — | 股関節屈曲拘縮 |
| 2. 下腿切断 | — | 膝関節屈曲拘縮 |
| 3. サイム切断 | — | 膝関節伸展拘縮 |
| 4. リスフラン関節離断 | — | 足関節屈曲拘縮 |

はき 16-90 大腿切断後の指導で正しいのはどれか。

1. 背臥位で断端の下に枕を置く
2. 腹臥位の励行
3. 股関節の外転位保持
4. 車いす乗車の励行

はき 18-90 患肢で荷重するときに義足を必要とする切断部位はどれか。

1. 大腿切断
2. 膝関節離断
3. サイム切断
4. 中足骨切断

はき 22-91 活動性が高い下腿切断患者に適した義足の足継手はどれか。

1. 固定足
2. 単軸足
3. 多軸足
4. エネルギー蓄積型足

はき 24-85 我が国において 1990 年以降の下肢切断の原因として最も多いのはどれか。

1. 外傷
2. 骨髄炎
3. 骨肉腫
4. 糖尿病性壊疽

はき 27-84 血管障害による下肢切断について正しいのはどれか。

1. 早期からの断端圧迫は禁忌である。
2. 非切断側の血流障害を評価する必要はない。
3. 切断直後に幻肢痛を生じる。
4. 糖尿病性足部壊疽は原因となる。

【骨折】

はき 13-96 大腿骨頸部骨折で手術直後に行わないのはどれか。

1. 創部へのホットパック
2. 両下肢の関節可動域訓練
3. ベッド上での体位交換
4. 車いす座位訓練

はき 17-91 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換手術前後のリハビリテーションで正しい記述はどれか。

1. 手術前は両下肢の自動運動を禁止する。
2. 手術創が癒合し抜糸してから座位を開始する。
3. 座位が安定してから歩行訓練を開始する。
4. 術後 1 か月は患肢の荷重を禁止する。

はき 28-88 大腿骨頸部骨折について正しいのはどれか。

1. 交通事故による受傷が最も多い。
2. 寝たきりの原因となることが多い。
3. 安静期間において手術を行うことが推奨される。
4. 術後 8 週以降で荷重訓練を開始することが多い。

【腰痛】

はき 6-96 腰痛の治療について誤っている記述はどれか。

1. 運動療法により姿勢の改善を図る。
2. ウイリアムス体操は腰椎の伸展訓練である。
3. 間欠牽引はマッサージ効果を期待する。
4. 軟性コルセットは腹圧を高め症状を軽減する。

はき 14-94 腰痛患者のリハビリテーションで誤っているのはどれか。

1. 膝と股関節を軽く屈曲して寝るように指導する。
2. 物を持ち上げる際には中腰姿勢をとるように指導する。
3. 腹筋の筋力増強訓練をする。
4. 股関節のストレッチ体操を指導する。

切断・骨折・腰痛（18問）

あまし国家試験 リハビリテーション医学

【切断】

あ 18-99 下肢の切断原因で近年特に増加しているのはどれか。

1. 腫瘍
2. 交通外傷
3. 血管障害
4. 労働災害

あ 21-100 下肢切断患者の幻肢痛について正しい記述はどれか。

1. 断端部の神経痛である。
2. 麻薬の使用は禁忌である。
3. 義足歩行時に著明となる。
4. 早期の義肢装着が有効である。

あ 23-85 下腿切断術後に起こりやすい拘縮はどれか。

1. 脛骨内旋拘縮
2. 膝関節屈曲拘縮
3. 股関節伸展拘縮
4. 股関節内転拘縮

あ 24-86 下肢切断後の合併症で義足歩行訓練に有利に働くのはどれか。

1. 浮腫
2. 幻肢感覚
3. 血腫
4. 骨突出

あ 25-86 カナダ式ソケットの適応となるのはどれか。

1. 股離断
2. 大腿切断
3. 膝離断
4. 下腿切断

あ 27-87 下肢切断で最も頻度が高いのはどれか。

1. 膝関節離断
2. サイム切断
3. 大腿切断
4. 下腿切断

あ 28-87 下肢切断で断端管理の目的として誤っているのはどれか。

1. 浮腫予防
2. 筋力強化
3. 断端成熟促進
4. 拘縮予防

【骨折】

あ 8-106 骨折のリハビリテーションについて誤っている記述はどれか。

1. 固定中の関節は等張性の運動を行う。
2. 固定されていない関節の運動も行う。
3. 下肢では段階的な荷重歩行訓練を行う。
4. 関節可動域訓練前に温熱療法を行う。

あ 10-104 骨折について誤っている記述はどれか。【解答2つ】

1. 介達牽引は皮膚に絆創膏を巻きつけ、その上から牽引する。
2. 直達牽引は骨に鋼線を刺入して牽引する。
3. ギプス固定中も等尺性筋力強化を行う。
4. 関節可動域訓練は骨癒合が完成してから行う。

あ 14-104 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換術後のリハビリテーションで誤っているのはどれか。

1. 臥床中の排痰訓練
2. 両下肢の関節可動域訓練
3. 座位からの立ち上がり訓練
4. 患部への極超短波療法

あ 23-88 大腿骨頸部骨折に対する人工骨頭置換術後のリハビリテーションで正しいのはどれか。

1. 骨盤牽引を行う。
2. 早期に荷重を開始する。
3. 股関節内旋運動を行う。
4. 患部に極超短波療法を行う。

あ 25-89 大腿骨頸部骨折のリハビリテーションで正しいのはどれか。

1. リハビリテーションは手術後から開始する。
2. 内固定術の場合、脱臼肢位に注意する。
3. 術後疼痛緩和のために極超短波療法を行う。
4. 人工骨頭置換術の場合、術直後から歩行訓練を行う。

【腰痛】

あ 2-99 腰痛の治療で誤っている記述はどれか。

1. 急性期から積極的に腰痛体操を行う。
2. 漸増的に腰椎の間欠牽引療法を行う。
3. 訓練法にウィリアムズ体操がある。
4. 温熱療法を行う。

あ 3-106 腰痛について誤っている記述はどれか。

1. 直立歩行が原因の一つである。
2. 腹腔内の臓器疾患でも起こる。
3. ラセーグ徴候は椎間板ヘルニアでみられる。
4. 急性期には股関節・膝関節伸展位を保持させる。

あ 10-106 腰痛の治療で適切でない記述はどれか。

1. 急性期には間歇牽引を行う。
2. 持続牽引は6～8kgの重錘で行う。
3. 温熱療法は筋肉のスパズムを除く効果がある。
4. 運動療法は腹筋の強化を行う。

あ 13-106 腰痛の運動療法で正しいのはどれか。

1. 治療よりも予防が主な目的である。
2. 速いスピードで体幹を動かす。
3. 体幹の回旋運動は伴わない。
4. 腰椎前弯が増強する姿勢を指導する。

あ 16-99 腰痛に対する運動療法で誤っているのはどれか。

1. 腰椎から骨盤にかけてのアライメント矯正
2. 体幹・下肢のストレッチ
3. 体幹筋の筋力強化
4. 体幹の速い回旋運動

あ 23-87 腰痛に対して行われるリハビリテーションで正しいのはどれか。

1. ウィリアムス体操
2. フレンケル体操
3. ボバース法
4. ボイタ法